

## ダニエル書1章「王に仕える備え」

### 1A バビロン化されるユダヤ人の少年 1-7

#### 1B 主による捕囚 1-2

#### 2B 王に立つための養育 3-7

### 2A 神の好意を得るダニエルたち 8-16

#### 1B 身を汚さない心定め 8-14

#### 2B 献身を尊ばれる主 15-16

### 3A あらゆる知識と知恵 17-21

## 本文

ダニエル書1章を開いてください。ついにダニエル書に来ました、これまでの預言書もちろん重要な書物ですが、ダニエル書は終わりの時の預言を鳥瞰的に見ることができる、貴重な書物です。バビロンの時代から、ギリシヤ・ローマの新約聖書時代までを見ることができます。旧約聖書の中で、実はマラキ書よりも後の旧新約の中間期をこの書で読むことができます。そしてイエス様が再臨される時に至るまで、つまり今の時代と将来に至るまでを眺めることができます。そして、ダニエル書は預言的に重要なだけでなく、ダニエル個人の霊的生活が注目に値します。覚えていますか、エゼキエル書の学びにおいて、義人としてダニエルが、ノアとヨブと並んで出てきました(14:14)。ノアとヨブは古い人ですが、エゼキエルにとってダニエルは今の人です。それだけ、彼の名がバビロン中に広まっていたことを窺わせます。

1章は、バビロンという非常に異教的な国の中で、ダニエルが国の役人として仕えはじめます。けれども彼の真の主人は神ご自身である、という内容になっています。

### 1A バビロン化されるユダヤ人の少年 1-7

#### 1B 主による捕囚 1-2

1:1 ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカデネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。1:2 主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手に渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の神の宝物倉に納めた。

時は、バビロン捕囚です。バビロン捕囚と言っても主に三回ありましたが、エゼキエルは第二次捕囚で紀元前 597 年でした。そして紀元前 586 年に第三次によって神殿が破壊され、捕囚は終わります。ここでは第一次の捕囚で、605 年でした。ここにあるとおり、エホヤキムの前のエホヤキムが治世を取っていた時で、第三年目です。エジプト軍が、カルケミシュの戦いでバビロンに敗北し、それまでエホヤキムはエジプトに仕えていましたが、この時からバビロンが自分たちの主人と

なりました。大きな転換期となったのです。それで、主がエレミヤに、これまでの預言を書きとめなさいと命じられて、バルクによって巻き物にさせ、読ませました。ところが、それをエホヤキムが切り裂き、火で焼いたという出来事がエレミヤ書 36 章にありましたね。ですから、ここはネブカデネザルが、自分がユダにとっての支配者になったのだということを示すために、神の宮から器を取り出し、また 3 節にあるように、王族や貴族から捕え移したのです。

午前礼拝で、この捕囚をさせたのは他にもない、主ご自身であることを指摘しました。そのことが詳しく書かれているところが列王記第二 24 章にあります。「24:3-4 ユダを主の前から除くということは、実に主の命令によることであって、それは、マナセが犯したすべての罪のためであり、また、マナセが流した罪のない者の血のためであった。マナセはエルサレムを罪のない者の血で満した。そのため主はその罪を赦そうとはされなかった。」ヒゼキヤの息子マナセが、赤子を偶像のために火に捧げたという罪に対して、主はユダを取り除くと決められました。当時のエルサレムの住民や王たちは、いかにバビロンから自分たちを守るかということに焦点を合わせていましたが、神の預言者たちは飽くまでも、「あなたと主の関係はどうなのですか？そして主は、このことによってご自分に立ち返るように語られているのですよ。」と言っていたのです。そして、それを自分のものとして受け止める時、つまりいろいろなことが起こっていても、主がこのことをなしておられるのだとへりくだる時に、ダニエルのように主に仕える姿勢が生まれます。

もう一つ、既にヒゼキヤ本人に主から目を離して、自らの功績をほめる高慢が芽生えていました。バビロンからの使者に、宝物蔵にあるものを全て見せました。イザヤが来て、こう預言しました。「イザヤ 39:6-7 見よ。あなたの家にある物、あなたの先祖たちが今日まで、たくわえてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されまい、と主は仰せられます。また、あなたの生む、あなた自身の息子たちのうち、捕えられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者があろう。」この時にイザヤが預言していた「宦官となる者」が、ダニエルや友人三人であります。

そして、ネブカデネザルがエルサレムの神の宮から、「シヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰った」とあります。当時の世界は非常に宗教的で、自分たちがある国を征服すると、このように相手国を代表する神のものを、自分の神のところに持ってくることによって、自分たちの神がその国の神を征服したと考えます。ネブカデネザルの神はマルドゥクという名でした。

「シヌアル」というのも、聖書の中で大きな響きがあります。これは今のイラク南部の地域であり、創世記では、かつてニムロデが主に反抗して町を建てた所でした(10:10)。そしてその平地で人々はバベルの塔を建てようとしていました(11:2)。そこでその地域に住むアブラハムを主が、「あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。(12:1)」と呼び出されました。それにも関わらず、イスラエルの民は反抗に反抗を重ねて、かつて自分の父祖がいたところに戻ってきたのです。言わば、「完全に元の状態に戻ってしまった」ということでしょうか。主による

救いを味わったのに、再び世に巻き込まれてしまった者と同じです。けれども失われたままで主は済ますことは決してなさいません。それが、ダニエル書が啓示している神のご計画です。ダニエルとその友人を通して、神がバビロンの国と世界に働きかけ、またダニエルの祈りを主が聞かれて、70年後の捕囚を終わらせ、エルサレムに帰還するようにされたのです。

## 2B 王に立つための養育 3-7

1:3 王は宦官の長アシュペナズに命じて、イスラエル人の中から、王族か貴族を数人選んで連れて来させた。1:4 その少年たちは、身に何の欠陥もなく、容姿は美しく、あらゆる知恵に秀で、知識に富み、思慮深く、王の宮廷に仕えるにふさわしい者であり、また、カルデヤ人の文学とことばを教えるにふさわしい者であった。1:5 王は、王の食べるごちそうと王の飲むぶどう酒から、毎日の分を彼らに割り当て、三年間、彼らを養育することにし、そのあとで彼らが王に仕えるようにした。

ネブカデネザルは、自分の国を支配するに当たって、征服した国々の王族から自分の下で仕える者を選びました。そうすることによって、いつまでも諸国民がバビロンに従属することができると考えました。ユダヤ州については、これらユダヤ人が管理するのが適切だと考えました。そして、国の中枢で働くのですから、知的にも、また身体も優れた人でなければいけません。容貌もその条件でした。サウルがイスラエルの王に選ばれた時、彼が非常にハンサムで背が高かったことを思い出してください(1サムエル 9:2)。これは異邦人の国々が王やその側近に求めた資質です(1サムエル 8:5 参照)。

そして、「カルデヤ人の文学とことば」を教えました。カルデヤ人は、バビロンの元来の民族です。日本が大和民族から発生しているところから、同じことが言えます。ここでユダの民であることから、彼らがバビロンに仕える者としての準備が行なわれたのです。このようにバビロン教育を受けて、それから、王が食べる物と同じものが割り当てられたのです。ここも大事です。これも当時の習慣として行われており、捕えられたエホヤキン王は後にバビロンで牢屋から釈放され、バビロンの王が彼を自分の食卓の席に付かせました。ヨセフも、カナン地の地から来た兄たちを自分の食卓に着かせました。ダビデが、ヨナタンの息子メフィボシエテを同じ食卓に着かせました。そして、教会に対してもイエス様は、ラオデキヤの教会の者たちに、「悔い改める者には、共に食べる、」と約束されました。とこれは、王と同じ恵みにあずかることを意味すると同時に、王にはもう決して逆らわない、王のものにされていることも表しています。ですから、今、バビロンの王と同じものを食べることによって、王の恵みにあずかり、王と一つになって、王のものになることを意味していました。

そして、ダニエルと友人らは、容貌も良いだけでなくIQも優れていました。けれども、それだけではないことを、後の話が教えてくれます。もっと大切なもの、霊的素質を彼らは持っていました。かつてヨセフがそうでした。エジプトにおいて、彼は美男子であったためにポティファルの妻に言い寄

られました。けれども神を恐れて、その場から逃げました。後のペルシヤ時代の王妃エステルも同じです。彼女は美人でした。けれどもそれ以上に、養父モルデカイによく従い、宦官が勧めたものの他は、何も求めない慎みがありました(エステル 2:10,15)。自然に与えられた才能があるから、この人はいろいろなことができるのだというのは、キリスト者の間ではそうではないということが、ここからはっきりと分かります。

1:6 彼らのうちには、ユダ部族のダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。1:7 宦官の長は彼らにほかの名をつけ、ダニエルにはベルテシャツアル、ハナヌヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。

まずユダヤ人名を見ると、そこに両親の信仰深さを垣間見ることができます。ダニエルは「神は裁き主」です。ハナヌヤは「ヤハウエは恵み深い」です。ミシャエルは「神である方は誰か」です。そしてアザルヤは、「主は助けられる」です。これら親の信仰が、彼らが完全にバビロン化されることから彼らを守りました。ちょうどモーセがそうでした。パロの娘によって乳母として雇われた実の母は、モーセが乳離れするまでの間、ヘブル人の神の知識を植え付けていたはずですが、なぜなら、彼もエジプト人のあらゆる学問を教え込まれたにも関わらず(使徒 7:22)、40歳の時に同胞のイスラエル人を助けようとして、「主の教育と訓戒によって育てなさい。(エペソ 6:4)」の教えは非常に大切です。

そして王族の全ての人々が腐敗していたわけではないことを、ここの箇所は教えています。当時のエホヤキムはエレミヤに激しい敵対心を抱いていましたが(エレミヤ 36章)、王の周囲の人々は彼の預言を聞き、一部の人はその言葉を恐れていました。私がエレミヤであったなら、自分が行なっている事は本当に徒労に終わっていたと完全に落胆していたと思いますが、決してそうではないことをダニエル書は教えてくれます。そして、彼が預言した書物をダニエルは後で読み、エルサレムの町について彼は神に願い求めました(ダニエル 9章)。

そしてダニエルと三人の友人の名前ですが、「神は裁き主」であるダニエルは、「ベルテシャツアル」で「ベルのご加護を」という意味です。ベルはバビロンの神です(イザヤ 46:1)。「ヤハウエは恵み深い」のハナヌヤは、「シャデラク」つまり、バビロンの太陽神「ラク」を指し、「太陽神の光を受け」という意味です。「神である方は誰か」という意味のミシャエルは「メシャク」で、「アクである方は誰か」です。イスラエルの神から異教の神アクに摩り替えられました。そして、「主は助けられる」のアザルヤは、「アベデ・ネゴ」です。これは「ネボのしもべ」です。ネボは、バビロンの神ベルの息子と考えられています(イザヤ 46:1)。自分の名前というのは自分が誰であるかを知るアイデンティティになりますから、彼らは世の影響の中に生きなければいけません。異教の神の名が自分の名になっているのです。

けれども彼らは初めの自分の名前と身分を覚え、決して捨てることはありませんでした。ここにあるのは、やはり自分が主によってここに置かれているのだという自負であります。主に召されたのだという確信と自負こそが、ちょうど全く異教、また世的な環境の中でもそれでもキリストの証しを立てられる力となります。「ヨハネ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」

## **2A 神の好意を得るダニエルたち 8-16**

### **1B 身を汚さない心定め 8-14**

1:8 ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。

ダニエルの心には、主がここに自分を置かれたということがあります。ですから、1ペテロ 2 章にあるように、神を恐れ、王を尊んでいました。しかし、主ご自身に対する忠誠、その関係の中を汚すようなものがあれば、それは王を尊びつつも、神を選び取る決断が必要です。私たちの信仰告白の根本は、「イエスは主」というものです。イエス様が、全てのことにおいて第一であられることです。「コロサイ 1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。」心の王座にはイエス様がおり、外の何物にも従わないことを意味します。自分の願いも、他の人の願いも、それよりもイエス様の願いを優先させます。イエス様が弟子たちに言われましたね、「ルカ 9:23 だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」イエス様だけに従い、他の何物にも従いません。

ここで私たちが考えなければいけないのは、イエス様を主とすることは、自分の意志を固く持つのではなく、自分の強い意志を捨てることです。実は、私たちは「これをやります。」と強く決断しているものがあります。いかにイエス様の意志に、自分を明け渡すことができるか？ということであり、自分の知性があります。自分の感情があります。そして自分の意志があります。それをいかに手放すか、ということ。全てを主にゆだねるか？ということ。ですから、これは信頼の問題になります。このような状況にあっても、主が良くしてくださり、深く心にかけてくださるのかどうか？主がそう言われるのでしたら、私はあなたを信頼しているのですから、従いますという信頼の問題になるのです。信仰によって、こうした行ないがでできます。

具体的には、ここでは、「王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒」です。午前礼拝でも説明しましたように、二つのことがここで自分の身を汚すことになるのでダニエルは判断しました。一つは、レビ記 11 章にある食物規定です。汚れた動物があり、それを食べてならないと命じられている規定

があります。それに違反する食べ物が出て来た可能性があります。また、血を絶対に食べてはならないという命令がレビ記にあります。おそらく、血がしたたるといったようにあったかもしれません。もう一つ、コリント第一 10 章にもありますが異教の宮に供えられた肉が出て来たのかもしれませんが。

私たちも、異教の社会に生きています。神棚や仏壇、仏式の葬儀や神道の儀式への参加の問題があるでしょう。今年、葬儀セミナーを行ないたいと思っていますが、前回のセミナーでは、キリスト教の葬儀会社の社長さんは、「素振りが必要です」と言っていました。野球の試合に初めから出場することはできません、普段のバットの素振りがあってこそ、現場でのバッティングがあります。したがって、普段からイエスが主であるということ、生活の各場面で心の中に抱き、また告白する時に、何をすればよいのか、御心になつた行動を取ることができる、というものです。

偶像礼拝の他には、不品行があるでしょう。若い女性であれば、男性の彼氏から性行為を求められるかもしれません。また酩酊があるでしょう。職場や学校での付き合いで飲み会があるかもしれません。また偽りがあるでしょう。会社の中で不正行為になるようなことを、上司に命じられるかもしれません。それらが、みなやっているということで誰もが行っている社会があります。けれども、それでも、自分の身を汚すまいと心に定めるのです。

1:9 神は宦官の長に、ダニエルを愛しつくしむ心を与えられた。1:10 宦官の長はダニエルに言った。「私は、あなたがたの食べ物と飲み物とを定めた王さまを恐れている。もし王さまが、あなたがたの顔に、あなたがたと同年輩の少年より元気がないのを見たなら、王さまはきっと私を罰するだろう。」

ここに、宦官の長の心を動かしたのは、主ご自身であることが書かれています。私たちが神を主として、この方に明け渡すのであれば、主が責任を取ってくださいます。自分を主のものとすることによって、主が全てのことを私たちのために動かしてくださいます。聖書には、異教の王などに好意を与えてくださる神の働きを見ます。ヨセフは、主人ポティファルによって、監獄に入れられましたが、「主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。(創世 39:20-21)」ネヘミヤが、ペルシヤ王アルタシャスタの献酌官であった時に、エルサレムに一時帰還する申し出をしましたが、王はそれを許しました。「私の神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくれた。(2:9)」主は、王の心や、上に立つ人々の心を、ご自分の思われるままに動かされます。

そして宦官の長は、尤もな恐れを抱いています。王から罰せられるであろうと。2 章以降を読むと分かりますが、ネブカデネザル王は命令に従わなければ、手足を切り離させ、家はごみの山とさせるということもするような怖ろしい王です。事実、3 章でダニエルの友人たちを燃える火の炉の中に投げ入れました。ですから、宦官の長の怖れは尤もなのです。そこでダニエルは、宦官の長に

寄り添いました。むやみに要求したのではなく、自分も知恵を尽くして宦官の長と解決法を考えました。権威者、権力者を敬うことはいつも大切です。箴言 16 章 7 節には、こう書いてあります。「主は、人の行ないを喜ぶとき、その人の敵をも、その人と和らげる。」

1:11 そこで、ダニエルは、宦官の長がダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤのために任命した世話役に言った。1:12 「どうか十日間、しもべたちをためしてください。私たちに野菜を与えて食べさせ、水を与えて飲ませてください。1:13 そのようにして、私たちの顔色と、王さまの食べるごちそうを食べている少年たちの顔色とを見比べて、あなたの見るところに従ってこのしもべたちを扱ってください。」1:14 世話役は彼らのこの申し出を聞き入れて、十日間、彼らをためしてみた。

十日間、野菜だけを与えて私たちを試してください、とお願いしたのです。そうすれば、宦官の長は自分が殺されるという恐れも解消でき、ダニエルの願いを聞くこともできます。ヤコブは手紙の中で、知恵を求めるように勧めました。「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。(ヤコブ 1:5)」知恵ということを考える時に、世渡りが上手ということを私たちは思っています。いいえ、そうではありません。聖書の語る知恵とは、相対立する状況がある時にその中でも平和をもたらすことのできる言葉や考えであります。ヤコブ書に、こう書いてあります。「しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。(3:17)」とあります。

こうしてダニエルは自分と友人らに、信仰によるテストを課しました。「十日間」という数字は、試される時に出て来ます。かつてバビロンによってエルサレムが滅んだ後に、残るわずかなユダヤ人たちがエジプトに下ろうとしていた時、エレミヤに主の御心を求めました。エレミヤは主に伺って、それで十日たってからようやく、主から答えがありました。下ってはならないということですが、実は彼らはすでにエジプトに下ると決めていましたね。このように、試される時です。他に、スミルナの教会に対するイエス様の言葉があります。牢に投げ入れられて、「十日間苦しみを受ける(2:10)」とイエス様は言われました。試される期間ですが、けれども言い換えると、それは東の前で、終わりが来るということです。永久にそのような状態ではない、ということも意味します。

## 2B 献身を尊ばれる主 15-16

1:15 十日の終わりにになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。1:16 そこで世話役は、彼らの食べるはずだったごちそうと、飲むはずだったぶどう酒とを取りやめて、彼らに野菜を与えることにした。

主は、彼らのご自分への信頼に応えてくださいました。人間にはできないことを、ご自身がしてくださいました。その肉体を強めてくださったのです。このように、私たちが主に忠実であれば、主が

守ってくださいます。ダニエルたちのように、すぐにその救いの手が与えられることもあります。けれども、後に救いの御手が伸びることもあります。ヨセフのことを思い出してください。先に引用したように、ポティファルの妻が言い寄って、彼は神を恐れて、その場から逃げました。ところがその良心のゆえに行為に対して、対価は監獄でした。しかも二年間の懲役でした。しかし、二年後にはその苦しみから救ってくださったのです。パロの前に出て行き、エジプトの総理大臣にしたのです。そして、兄弟たちとも和解することができ、父ヤコブの家族を飢饉から救うために尽力できたのです。時差はありこそすれ、主はヨセフを守ってくださったのです。

ダニエル書は、神への信頼にともなう救いの証しがこの他にも出て来ます。友人たちが燃える火の炉から救われました。ダニエル自身が、獅子の穴から救われました。6章23節には、「彼が神に信頼していたからである。」とあります。パウロが、小アジアで受けた苦しみについて話している時、それは耐えられないほどの圧迫で、命さえも危うくなると言っています。そしてこう言いました。「2コリント 1:9-10 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。」

### **3A あらゆる知識と知恵 17-21**

1:17 神はこの四人の少年に、知識と、あらゆる文学を悟る力と知恵を与えられた。ダニエルは、すべての幻と夢とを解くことができた。1:18 彼らを召し入れるために王が命じておいた日数の終わりになって、宦官の長は彼らをネブカデネザルの前に連れて来た。1:19 王が彼らと話してみると、みなのうちでだれもダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤに並ぶ者はなかった。そこで彼らは王に仕えることになった。1:20 王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。

三年間の養成プログラムが終わりました。その後、四人は王の前に連れて来られました。なんと、彼らは他の知者たちよりも、十倍もまさっていました。当時のバビロンは、学問が天文学や星占いと深く結びついていたので、ここにあるとおり呪法師、呪文師とありますが、つまりシンク・タンクのような国の指導者の顧問であり、学者集団でした。その出所を、ダニエル書は明らかにしています。17節「神は・・・」ですね。後にネブカデネザルはダニエルに、「聖なる神の霊があなたにあり(4:9)」と言っています。御霊が賜物として彼らに、その能力を与えられたのです。

私たち人間には天賦の才能が与えられています。天才と言われる学者もおり、芸術家、歌手など、初めから備わっている能力があります。けれども、それらと神が与えられる賜物は違います。ダニエルは、2章でネブカデネザルの見た夢の解き明かしを行ないます。それは、バビロンの王のために行なったことではありません。神々と呼ばれる偶像ではなく、天に神がおられることを証し

するためにその能力を用いました。このように、神に関する事柄、神に栄光が与えられるようなものだったからこそ、神はダニエルに夢を解き明かす能力を与えられ、それが御霊の賜物なのです。

そして御霊の賜物は、「みな<sup>の</sup>益」になるように用いられます。コリント第一 12 章で、「しかし、みな<sup>の</sup>益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。(7 節)」とあります。自分の益のためではありません。ダニエルはその能力のゆえに結果的にバビロンにおいて高い地位に着きましたが、けれども自分の同胞、神の民のことを決して忘れませんでした。8章から、彼はユダヤ人のこと、そして聖なる都エルサレムのことについての幻を見ます。そして9章では、彼らのために泣いて悔い改めて祈っています。自分の利益を求めていなかったのです。神の民全体の利益を求めていました。

1:21 ダニエルはクロス王の元年までそこにいた。

ここからダニエル書は、列王記第二また歴代誌第二と、エズラ記をつなぐ書物であることを知ります。そして、イザヤ書 39 章から、クロス王についての預言が始まる 40 章以降をつなげる書物であることがわかります。紀元前 586 年、ゼデキヤが王であった時にバビロンがエルサレムを破壊しましたが、ペルシヤが 539 年にバビロンを倒しました。そしてペルシヤの初代王クロスが、ユダヤ人に対してエルサレムに帰還して、神の宮を建てなさいという命令を發布します。

その時までダニエルはバビロンの町にいました。具体的にはクロス王の第三年まで生きていたことを私たちは知っています。10 章以降の幻はクロス王の第三年に与えられたからです(1 節)。その間、つまり、ユダヤ人が約束の地から引き抜かれていた間、神はダニエルをご自分の証人に立てて、続けてご自分の働きを行なわれていたのです。2 章以降で、ダニエルが夢や幻の解き明かしによって、神が異邦人の王たちの背後に働いておられる主権者であることを教えて行かれます。「見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。(詩篇 121:4)」ご自分の民は不真実であったけれども、神は真実であられました(ローマ 3:3-4)。